フィヒテの道德學に就ての考察（承前）

世良壽男

六、前にも述べたる如く、知識學の理論的部門はかの第三根本命題より派出せられたる二つの命題中の第二の命題、卽ち『自我は自己自からをば、非我によりて制限せられたるものとして立す』より出發し、自我が自から立したる非我によりて制限せらるることによりて、吾人の知識體系が發展し、こに吾人の客觀世界が成立するに至る過程をば論究したものである。換言すれば、理論的知識學は、如何にして自我は表象する本質(Vorstellendes Wesen)卽ち知性(Intelligenz)として自からをば發展するか、をば證示したものであつた。然しながら、今、この非我が自我をば制限する、といふことは、如何なる意味であらうか。自我は何故に知性として自からを發展しなければならぬであらうか。勿論この場合、非我が自我をば制限するといふことは、實は唯だ、自我の制限(Einschränken des Ich)をば制限する、のであつて、換言すれば、自我によりて制限せられたる自我をば制限するのであつて、自我自體(Ich an sich)をば制限するのでは

ない、(G. d. g. W. 321) にしても、然し何故に自我は、自から立したる非我によりて、此の非我を立することによりて制限せられたる自我をば制限し、こに客觀世界をば立しなければならぬであらうか。卽ち客觀世界の實在性といふことの意味は果して如何なるものであらうか。今理論的知識學の敎ふる處によれば、非我の凡ての規定は、非我が自我の對象である限りに於て、知性によりて與へられる。而かも非我それ自からは、知性に對して、決して知性によりて與へられたものではない。こは理論的の領域內にては、唯だ自我をば制限する處の或物、又は依て以て自我が自からをば制限し、それの活動をば阻止する處の或物である。又は制限そのものの成立する處の條件である。自我の活動は、それをば拒止する處の障礙(Anstoss)に出會ふが故に、こは自己自からに歸り行くことによりて、こに知性又は理論我が成立する。而て此障礙は、卽ち非我に外ならないのである。然しながら此の障礙又は非我は何故に又何處より起り來るのであらうか。こは理論我に對しては、到底說明することの出來ぬ問題である。何となれば、理論我は唯だこの障礙又は非我の制約の下にのみ可能である。從て、理論我に對しては、この障礙又は非我は如何にしても認めなければならぬ原本的の事實であるからである。而かゝなほ此の問題は、どこまでも必然的でな

ければならぬ。若し此の問題にして解決せられなければ、理論我それ自からの本質、及びそれの對象として發展する處の客觀世界の實在性といふことは、全く說明することを得なくなるであらう。かくてこの障礙の權利付け（Deduktion des Anstosses）といふことは、知識學の終極の問題であり、而かも、こは、それの理論的部門に於ては、全く不可能なるを以て、こは唯だ、それの實踐的部門に於てのみ解決せらるることの出來る、實踐我の根本問題でなければならぬ。之を要するに、知識そのものの本質、又は客觀世界の實在性の意味といふ如き問題は、單に、自我が非我によりて制限せらるることによりて、非我をば認め行く過程、卽ち理論我のみをそれの對象とする處の理論的知識學のよく解き得る處ではない。事物の實在性の問題は、如何にしてもその究極に於て、實踐的立場に於てにあらざれば、これを解決することは出來ぬ。實在性をば成立せしむる處のものは、決して理論我ではなくして、實踐我である。知識ではなくして意志である。而てここに理論的知識學より實踐的知識學へ、移り行かなければならぬ契機が存するのである。

七、今かの理論的知識學の原理であつた『自我は、自己自からをば、非我によりて制限せられたるものとして立す、』といふ命題の中には、一つの主要なる對立が含まれて

居る。即ち制限せられたるものとしての自我、即ち知性(Intelligenz)としての自我、とSchlechthin に立せられたるものとしての自我、即ち絶對我(absolutes Ich)との對立これである。然しながら、此の如く、自己以外の或物即ち非我によりて制約せられたる知我と、自己以外の何物にも依存せず、全く無制約的なる絶對我とは、如何にして相結合せらるることが出來るであらうか。此の如き對立は明らかに矛盾である、而てこの矛盾は如何にして解決せらるべきであらうか。これが實踐的知識學に於て、先づ最初に起り來る處の問題なのである。而て吾人は、此の問題を解く爲めに、先づ知性及絶對我そのものの本質を明らかにし、これが內面的關係をば考へて見なければならぬと思ふ。

今フィヒテに從へば、知性としての自我は、勿論それの範圍內に於ては、それの特殊的規定に關して、どこまでも自己自からによりて規定せられる。而て又その限りに於て、それが自己の中に立する處のもの以外の何物も、それの中に存在しない。然しながら此の範圍それ自からは、彼れに對しては、自己自からによりて立せられたものでなくして、却つて彼れ以外の或物によりて立せられたるものである。即ち一般に、表象作用の仕方は全く自我によりてなさるるのであるが、然し自我が表象者(Vorstelle-

nd) である、といふことは、自我以外の或物によりて規定せられるのである。即ち吾人は、無規定的なる、而て無限に進み行く處の自我の活動に對して、一つの障礙(Anstoss)が起り來る、といふ假定による外は、決して表象をば可能なりとして考ふることは出來ぬ。かくて、知性一般としての自我は、無規定的なる、而て今迄は全く規定することを得なかつた非我に依存して居るのである。而て此の如き非我によりてのみ、自我は知性となることが出來るのである。而てフィヒテは、この知性としての自我と非我との關係をば、因果關係(Kausal-Verhältnis)として表はして居る。即ち知性は非我の結果であつて、非我は知性の原因である。これ自我にして知性たらんが爲めには、前述の如く、無限に進み行く處の自我活動の一部が止揚せられなければならぬ、而て此の自我活動の一部的止揚といふことは、自我に於ける非我の定立といふことによりてのみ可能であり、而て此の如く『一方に於ける活動の制限によりて、他方に於ける活動がかの止揚せられたる活動と等しき分量丈、交互規定の法則に從ひて、立せらるる、』といふことは、やがて因果關係に外ならないからである。(G.d.g. W. 443) 然しながら又飜つて考ふれば、この知性としての自我の原因である處の非我そのものは、どこまでも自我の中に立せられなければならぬ。元來自我は、『自己自からによる自己の定

立によりて、全く同一自我である。』即ち自我はどこまでも自己自からを立する所のものとしての自我であり、而て自己に於て立せざる處のものは、毫も自我の中に存在してはならぬ。それ故に、自我に於ては、何等他のものの結果(Bewirktes)といふ如きものは存在してはならぬ。從つて、かの知性の原因としての非我も、それ自からとしては、どこまでも自我の中に立せられたるもの、即ちこは、自我の結果、但し絶對我の結果としてのみ可能である。(G. d. g. W. 444) 而て、かくして、かの『自我はそれ自からをば非我によりて制限せられたるものとして立す、』といふ理論我の根本命題は、當然『自我は、非我をば、自我によりて制限せられたるものとして立す』なる實踐我の根本命題へ移つて行かなければならぬのである。

然しながら、問題は依然として殘つて居る。即ち、此の非我は、何故に絶對我の結果として、絶對我の中に立せられなければならぬであらうか。『自我は、それの本性上、非我に對して、因果性を有してはならぬ』にかかはらず、『自我は、非我に對して、因果性を有しなければならぬ、』(G. d. g. W. 447) といふことは如何にして可能であらうか。換言すれば、絶對我に對ける、自我と非我との對立の意味は如何なるものであらうか。今フィヒテに從へば自我は自己自からをば制限することなしには、非我を立することと

は出來ぬ。何となれば、非我は全然自我に相反對して居る。即ち非我であるところのものは自我でなく、而て非我が立せらるる限りに於て、自我は立せられないからである。從て、若し非我にして、全く量的關係なくして、無制限的に、又無限的に立せらるるならば、自我は決して立せられない。即ち自我の實在性は、全然否定せらるるであらう。それ故に、非我は、必ず一定の分量に於て立せられなければならぬ。而て、夫と共に、自我の實在性は、かくして立せられたる非我の實在性の分量だけ制限せられなければならぬ。即ち、非我を立すること (ein Nicht-Ich setzen) と、自我を制限すること (das Ich einschränken) とは同一意味である。(G. d. g. W. 455) かくて知性としての自我の成立の必然的條件であつた非我の定立は、絶對我の自己制限といふことによりてのみ可能である。即ち、絶對我の非我に對する原因といふことは、絶對我の自己規定といふことに外ならないのである。それ故に、問題は、この絶對我の自己制限といふことは如何なる意味であるか。何故に絶對我は、自己自からをば制限することによりて非我を立しなければならぬか、といふことに歸着しなければならぬ。

今フィヒテによれば、絶對我が自から自己をば制限することによりて非我をば立するといふことは絶對我が、自己の中に、必然的に二種の相反對せる活動を包含して居

るといふこと、又は絶對我が、相反對せる二種の活動として、必然的に、發展する、といふことでなければならぬ。元來、自我の本質は、前にも述べたる如く、それが絶對的に自己自からに對して自己自からをば立する、といふ行爲に存する。即ち、ここにては、それの行爲は唯だ自己自からのみに關して、決して他の何物にも關係せず、無限に自己自からに歸り行くところの行爲である。從つて、ここにては働らく自我が同時に對象としての自我であり、行爲は同時に所行であり、生産は同時に所産である。即ち、『無限の所産なるが、故に無限の活動であり、無限の活動なるが故に無限の所産なのである。』(G.d g.W.449) 即ち自我は、それの根源に於て、先づ此の如く無限なる無制約的なる、絶對的自己定立の純粹活動(reine Tätigkeit)として現はれて來なければならぬのである。然しながら翻つて又他方より考ふれば自我が此くの如く無限に自己自からを立して自己自からに歸り行く、といふことは、自我が自己自からをば對象とするといふことである。自我が自からをば對象とするといふことは、自我が自からをば限定するといふことである。而て自我が自からをば對象となすことによりて自からをば限定するといふことは、これやがて、自我が自からに對して、自からならざる非我を立するといふことである。かくて、かの無限的、無制約的なる自己定立の純粹活動は、

又同時に、必然的に有限的、制約的の客觀的活動(objektive Tätigkeit)として發展すべき契機を含むで居ると言はなければならぬ。而てここにかの自我の自己制限の根本的意味が存するのである。然るに今、凡て活動の對象は、『それが對象である限りに於て、必然的に、その活動に反立せられたる或物である。即ちこは活動に對して抵抗するところのもの(Widerstehende)又は對立するところのもの(Gegenstehende)である。』(G. d. g. W. 450)若し何等の抵抗又は對立なくんば、一般に何等活動の對象もなく、從つて何等客觀的活動もないであらう。それ故に客觀的活動の概念中には、已に、それが抵抗又は對立せらるるといふこと、從つてそれが、制限せらるゝといふことをば含んで居る。それ故に、自我の活動は、それが客觀的なる限りに於て、即ちそれが對象と關係する限りに於て、有限的、制約的であると言はなければならぬ。

此の如く、自我は、自からに對して對象をば立することによりて、即ちそれの活動が客觀的となる限りに於て、こは有限的、被制約的となるのであるが、然し同時に、この對象の定立に於て、自我は單にそれ自からにのみ依存して、決して、何等それ以外のものに依存しない。即ち自我は、これに於て、唯だ Schlechthin に制限せらるるに過ぎない。即ちこは自己制限に過ぎないのである。然しこの制限の限界は、果して何處まで達

するであらうか。こは全く自我の自發性によるもので而かもその限界點は無限のかなたに存在して居る。それ故に、自我は、それが制限せられなければならぬ點に於て有限的ではあるが、然しそれの限界が無限に次第に前方に置かれ得るが故に、そはこの有限性といふことに關して無限的である。即ち『そは、それの有限性に關して無限的であり、それの無限性に關して有限的である。』(G. d. g. W. 451) と言はなければならぬ。而てここに、かの有限的制約的なる客觀的活動と、無限的無制約的なる純粹活動との內面的結合點が存するのである。即ち自我に於ける純粹活動の無限性、無制約性といふこと、從つて絕對我は、決して自我の狀態(Zustand)ではなくして、それの目的(Ziel)である、理念(Idee)である。自我は無限性、無制約制をば實現せんが爲めに有限的、制約的たるのである。絕對我たらんが爲めに客觀的とならなければならぬのである。自我に於ては、絕對我と絕對的努力とは全く同一である。而て此の意味に於て、絕對我は schlechthin に非我に關係して居る、又は非我の原因であると言ふことが出來るのである。但しここに注意味すべきは、此の場合、かく schlechthin に絕對我に關係せる非我は、素より唯だそれの形式に關してのみ、即ちそれが自我以外の或物でなければならぬ、といふ點に關してのみ非我であつて、それの內容に關しては決して

非我ではないといふことである。これ非我は、どこまでも自我の中に自我によりて、schleentnin に立せられ、從つてこは全然自我と一致しなければならぬからである。然しながら又之れと同時に、非我は、それが形式に關して非我でなければならぬ限りに於いて、自我と一致することは出來ぬ。それ故にかの非我に關係せる自我の活動卽ち客觀的活動は、何等非我と自我との現實的同一に對する規定ではなくして、却つて此の規定にまでの傾向又は努力(eineTendenz, ein Streben zur Bestimmung)でなければならぬ。從つて、自己自からに歸り行く自我の純粹活動は、可能的對象に關してそは努力(Streben)但し無限の努力(unendlichesStreben)として現はれて來る而てこの無限の努力は、無限に、凡ての對象の可能の條件である。卽ち努力なくんば何等の對象も可能でないのである。(G. d. g. W. 454)然るに、此の無限の努力として現はるるところの自我の純粹活動はそれが無限の努力たる限りに於て、こは決して理論我の活動ではなくしてどこまでも實踐我の活動でなければならぬ。かくて、かの、理性にして實踐的たらざれば理論的たるを得ず、人間に實踐的能力なくんば何等の知性も可能でない、といふ實踐理性の上位の根本的意味は、實に、この、努力一般なくしては何等の對象も可能でない、といふ主張の中に充分指示せられてゐるのを見るのである。

此の如く自我に於ける純粹活動と客觀的活動又は絶對我と非我とは、無限の努力といふことに於て內面的に結び付いて居る。卽ちこれに於て、此二種の活動は、同一自我の必然的なる本質的活動として自我の中に、不可分離的に結合して居るのであるそれ故に又此の兩種の活動は、決して本質的に相異れる活動ではなくして、こは唯だ活動の發現の相異卽ち方向(Richtung)の異別に過ぎないとフィヒテは考へて居る。

今フィヒテに從へば吾人の純粹自我は、それが自己自からをば Schlechthin に立し、何等それ以外の對象に關係なく、無限に自己自からに歸り行くところの活動である限りに於て、それの活動の方向は、內部への方向、卽ち求心的方向(Zentripetale Richtung)である。然しながら、かの唯一つの點のみにては線を決定することを得ず、線の決定には、必ず、此一つの點に對して、更らに第二の點が與へられねばならぬと等しく、唯だ一つの方向は、決して眞の方向ではない。一つの方向は之に對する他の反對の方向によりてのみ可能である。それ故に、吾人は自我の絶對的活動に對して、一つの方向卽ち求心的方向をば、同時に、之と反對の方向卽ち遠心的方向(Zentrifugale Richtung)をばこれに歸することなしには、歸することは出來ぬ。若し自我にして、自己よりして離れ行くにあらざれば、如何にして、それの活動によりて自己自からに歸り行くことが

出來るであらうか。自我の活動に於ける求心的方向は、必然的に、遠心的方向をば豫想して居るのである。而てかれの活動の方向に於ける此の對立は、全く自我そのものの本質に基づくものであつて、若し吾人にして、此の自我活動の兩方向の對立をば拒否せんとするならば、吾人は自我をば、それの本質に於て止揚することとなるであらう。元來、自我の本質は、自我が自己自からをば、自己自からによりて構成するところの數學的點であるところに存する。これに於ては、素よりそこに何等の方向もなく、又一般に何等區別せらるべき對象も存在しない。この點が存する處、それが卽ち全體である。それの內容と形式とは、それに於て全く同一である。然しながら又翻つて考ふれば、此の如く自我が自己に對して(für sich)存在するといふことは、前にも述べたる如く、自我が自己をば對象とするといふことである。又は自我が自我をば反省するといふことである。反省は實に自我の法則である。而て、かの、『自我は自我なり』といふ根本原理は、實にこの自我に於ける純粹活動としての原本的反省をば言ひ表はしたものである。而かも此の反省は、全く內部へ向けられたる活動であつて、かの求心的方向は實にこの反省の方向に外ならないのである。而て、これに對して、反省せらるるところの活動、又は反省がそれに起るところの活動卽客觀的活動は、

必然的に外部へ向けられたる活動であつて、かの遠心的方向は、卽ちこの活動の方向をば示したものである。而かもこの兩活動は、純粹自我に於ては、反省せらるるものが全く同一なる限りに於て同一である。唯だそれが反省せらるる限りに於て、卽ちそこに方向の差が意識せらるる限りに於て、そは相異れるものとして意識せらるるに過ぎないのである。之を要するに、自我は向自的である。又は、そは、反省によりて自我たるのである。反省にまでの傾向は、實に自我の本性である。而て此の傾向をば滿足する爲めに、自我は自からよりして離出して外方に向ひ行かなければならぬ。卽ち遠心的方向をとらなければならぬのである。然しながら、自我は、この外方へ向けられたるところの活動をば又反省しなければならぬ。卽ちこの遠心的方向は或點に於て阻止せられて求心的方向とならなければならぬ。而かも、これに對して、自我は又この彼れの制限を越えて、無限に自我より離出し、行かなければならぬ。而てここに、吾人はかの絕對我、實踐我及び理論我の內面的關係をば見出すことが出來るのである。卽ち『自我は、それが凡ての實在性をば自からの中に包有し、而て無限性をば實現せんとをば要求する。而て此要求に對して、必然的に、それの根據に、絕對的に立せられたる無限的自我の理念が橫はる。而てこの絕對的に立せられたる無

限的自我は卽ちかの絕對我である。然し自我はよしそれが實際に、凡ての實在性をば、それ自からの中に包有するとはいへ、そは必然的に、それ自からをば反省しなければならぬ。而て此の反省の基礎にかの絕對我の理念が横はるのである。而て自我はこの理念を追ふて無限に進み行くのである。而て此の限りに於て自我は實踐的である。しかも、こは、反省にまでの傾向に從ひて、自己自からより離出し行くを以て、決して絕對的ではない。而て又それの反省には、かの自己自からより由來せる絕對我の理念以外には、何物もそれの根據に横はらず、又そは可能的障礙よりして全然捨象せらるるを以て、決して、理論的ではない。而てこの實踐的自我によりて、ここに、あらねばならぬ處のもの及び單なる自我によりて與へらるる處のものの系列が成立する。卽ち可想界(das Ideale)の系列が成立するのである。』『(G. d. g. W. 469—470)

かくて有限的なる理性的生類としての吾人の自我の特質は、それが實踐的たるところに存する。而て此の實踐我に於てかの絕對我と理論我とは內面的に結び付いて居るのである。卽ち、吾人の自我に對しては、前にも述べたる如く、絕對我は、それの狀態ではなくして要求であり、課題であり、理念でなければならぬ。卽ちそは、吾人に於て、決て、Seiende ではなくして、Sollende である。從つて吾人の自我は、絕對我ではな

くして絶對我であらねばならぬのである。又は絶對我たらんと欲するのである。換言すれば、實踐的たるのである。即ち自我は、それが實踐的たるが故に、無限に努力するが故に、又は絶對我をば標的として有するが故に、無限的絶對的たることが出來るのである。而て自我は、それが打克たなければならぬ處の、而てそれ自身理論的活動の必然的條件である處の、抵抗又は障礙に逢着する時にのみ實踐的たることが出來るのである。それ故に絶對我なくんば實踐我はない。自我をば實踐的ならしむる處のものは即ち絶對我の理念である。而て實踐我なくしては理論我はない。自我をば理論的ならしむる處のものは、かの實踐我が要求する處の障礙である。而かも理論我なくしては、自我に對して何等の對象もなく、何等の障礙もなく、何等の努力もなく、從つて何等の實踐我もないであらう。それゆえに理論我と實踐我との關係は、全く、手段と目的との關係である。自我は實踐的たり得んが爲めにそは理論的でなければならぬのである。即ち理論我は實踐我の手段であり、實踐我は理論我の目的である。之れを要するに、一切の知識は表象に歸着する。即ち知識の世界は表象の世界である。而かも、表象の世界は、それ自身必ずしも實在の世界ではない。唯だこれをば、實踐我即ち意志に關係せしめて考ふる時、そは始めて、それの實在性をば得

來たるのである。吾人は知るが故に行ふのではない。吾人は行ふことを要求せらるるが故に知るのである。理論我の背後には常に實踐我が存在する。而てこの實踐我は、やがて道德的意志である。而て道德的生活は、やがて、無限の努力の生活である。努力は、必然的に障礙をば豫想する。かくて、この知識の世界、表象の世界、卽ち吾人の現實の世界は、この打ち克たるべき障礙として卽ち實踐我又は道德我の活動の材料として、この實踐我又は道德我それ自からによりて要求せられ創造せられたものである。而て此の如くにしてのみ、吾人の現實世界としての客觀世界は、始めて、それの意義と實在性とを獲得することが出來るのである。而て又此の如くにし、生活及び意識の原理、又はそれの可能の根據は、全く、自我そのものゝ中に基礎付けらるることが出來るのである。

八、以上吾人は、フィヒテに從ひて、彼れの理論的知識學の原理より出發し、これの中に包含せらるるところの知性としての自我と絕對我との對立の意味をば尋ね、この兩者が實踐我の概念に於て結び付けることを明らかにし、かくて自我の本質は、全く無限の活動、無限の努力たる道德的意志であり、而てこの道德的意志の實現の必然的條件として、理論我從つて表象の世界が發展するといふ歸結に到達したのである。

吾人は今進んで、この實踐我の發展の根本形式卽衝動(Trieb)の體系につきて論ず、る前に、彼れの所說の特質をば明らかにする爲めに、彼れの立脚地の特異性につきて少しく反省して見たいと思ふ。先づ彼れの知識學は、吾人の世界は表象の世界である而て表象の世界は吾人の知性の必然的所產であるとする點に於て、こは、當然觀念論(Idealismus)でなければならぬ。然しながら、この知性そのものは、それより獨立せる、それ以外の或物卽非我の制約によりて始めて可能である。而て此の非我の必然的豫想と言ふことに關して知識學は又實在論(Realismus)であるといふことが出來るであらう。然るに、この知性をば制約する處の非我そのものは何處より來るか。こは言ふまでもなく、全く自我により、自我そのものの中に立せられたるもの、卽ち自我の所產である。卽ち『凡ては、それの觀念性に關しては、自我に依存して居るが、然しそれの實在性に關しては、自我それ自からが却つて依屬的である。而かも觀念的であることなしには、自我に對して何物も實在的であることは出來ぬ。卽ち自我に於ては、觀念的根據(Idealgrund)と實在的根據(Realgrund)とは同一である。』(G. d. g. W. 473) 而て此點に於て知識學は、嚴密には、實在的觀念論(Real-Idealismus) 又は觀念的實在論(Ideal-Realismus)である、とフィヒテは言つて居る。然しながら、如何なる自我が非我をば立す

るのであるか。こは決して、理論我ではなくしてかの無限に努力する處の實踐我でなければならぬ。而て此の意味に於て、知識學は又實踐的觀念論（prsktischerIdealismus）である。然るに、如何にして、自我はかく實踐的たることが出來るのであるか。又は何が自我をば無限の努力に於て立するのであるか。こは言ふまでもなくかの絶對我の理念でなければならぬ。かくて知識學は、この實踐我の基礎付けに關して絶對我の理念に關係る限りに於て、こは絶對的觀念論（absoluter Idealismus）であると言ふことが出來るのである。（Kuno Fischer's Fichte, s.377-8）

九、吾人は今やフィヒテに從ひ、進んで實踐我の根本形式をば規定しなければならぬ。前述の如く、吾人の自我の本質はそれが實踐我である處に存する。即ちそれが無限の活動無限の努力である處に存する。然しながらこの無限の努力は、それに對して障礙又は反對が與へらるるが故に可能である。換言すれば『こは、これに對して平衡をば保持する處の抵抗（Gegenstreben）の條件の下にのみ考ふることが出來る。』即ち抵抗なくんば努力はない。而かも若し此の抵抗にして、全く努力をば止揚するが如きものであるならば、そこには最早何等の努力なく、從つて自我はない。之に反して、

若し、努力にして、全く抵抗をば止揚するが如きものならば、そこには又何等の努力もなく、何等の自我もない。それ故に、努力と抵抗とは決して互に止揚することなく、常に平衡をば保持しなければならぬ。即ち『自我の努力に於て、同時に、之れに對して平衡を保持する處の、非我の抵抗が立せらる、』(G. d. g. W. 477)と言ふ命題がここに必然的に立せられて來なければならぬ。

此の如く、自我に於ける無限の努力は、これに對して、必然的に、平衡を有する所の抵抗が立せらるることによりて始めて可能である。從つて自我は常にそれの努力をば制限せられて見出す。又は、それの努力の中に自からをば、制限せられて見出すのである、而てこの努力と抵抗とは平衡を保持し、又互に相制約するが然し彼等の何れも他方の結果であつてはならぬ。努力は外方より生じたものでなくして、唯だ內部に於て、自己自からによりて立せられたる純主觀的の活動である。從つてそは外方に向はずして內方に向ふ。それ故に努力の要求する因果性は、直接に非我に關係せずして、唯だ自己自からに歸り行く處に存する。即ち自己自らか自己をば生產し得る處に存する。而て此の如く、純主觀的なる、自己自から自己をば生產するとこ

ろの努力(ein sich selbst produzierendes Streben)をば、フィヒテは、こを衝動(Trieb)と呼んで居る。(G. d. g. W. 479) 而て又此の努力と抵抗即ち自己反省の傾向と無限を實現せんとする努力とが結合することによりて、ここに、强迫(Zwang)又は不能(Nicht-Können)の感情が生ずるのである。(G. d. g. W. 481) それ故に、自我は、それの努力をば、制限せられて見出す限りに於て、そは同時に、衝動であると共に感情である。即ち自我は、自から衝動として感ずるのである、又は、刺衝(treiben)せられしものとして感ずるのである。而て衝動は自己の内的力よりの努力である點に於て、この衝動の感情は即ち力の感情(Kraftgefühl)である。而て此の衝動の感情としての力の感情は、凡て生活の原理である。生と非生とを區別するものは實に此の力の感情にあるのである。(G. d. g. W. 487) 吾人は、次にフィヒテに從ひて、此の衝動が如何なる形に於て、吾人の精神生活中に發展するかを概觀して見たいと思ふ。

十、前述の如く、衝動は、唯だ自我自からよりしてのみ起り來る。而てそは唯だ自我に對してのみ關係する。それ故に衝動はそれの原本的の性質に於て、先づ自我にまでの衝動(Trieb zum Ich)として現はれ來る。然るに自我の本性は、自我がそれ自からに對して存在する點に存する、即ち自我が自からをば反省する點に存する。それ故

にこの自我にまでの衝動は、又必然的に反省への傾向(Tendenz zur Reflexion)又は反省衝動(Reflexionstrieb)であると言ふことが出來る。然るに反省は制限を要求する。而て、自我を制限するものは對象である。即ち反省衝動は、對象なくしては滿足せらるることは出來ぬ。從つて反省衝動は必然的に對象への衝動(Trieb nachdem Objekte)として表はされる。然るに此の如き對象への衝動は自我に對しては、唯だ表象作用の觀念的活動によりて、のみ立せられるのである。從つて、この意味に於て、對象への衝動は、やがてこれをば表象衝動(Vorstellungstrieb)として表はすことが出來る。而て此の表象衝動によりて自我は知性(Intelligenz)として發現するのである。

然しながら、この表象衝動は、それが自からをば實現する爲めに、必然的に或る實在による制約、即ち實在根據をば有しなければならぬ。即ち自我は『自己自からより離出し、而て少くとも觀念的活動によりて、自己以外の或物をば生產せんとする衝動』として現はれなければならぬ。而てこの自己以外の實在をば創造せんとする衝動は、これを、實在への衝動(Trieb zur Realität)又は創造的衝動(Produktionstrieb)と名づくべきものである。然しこの創造的衝動は、それが衝動であり、努力であり、而て努力は常にこれに對して平衡をば保持する處の抵抗によりて對立せられなければならぬ限りに

於て、そは、『自我が觀念的活動により、事物(Ding)として實現することも出來ねば、又表現することも出來ぬところの對象に關係するのである。』從つて『自我は何等對象をば有せざるが、而かも不可抗的に對象の創造に向ひ行くことをば餘儀なくせしめらるる處の、而て單に感ぜらるるに過ぎない處の活動である。』『(G. d. g. W. 494)卽ちこの創造的衝動は、結果なき努力である。換言すれば『單に缺乏により、不滿足により、空虛によりて、それの充足をば求むる處の、全く未知の或物への衝動』である。而て此の如き實在への衝動をばフィヒテはこれを憧憬(Sehnen)の感情と呼んで居る。而て『此の如き憧憬によりてのみ、自我は自己自からより離出し、而て自己以外にあらねばならぬ所の或物が、自己の中に、又自己に對して立せられるのである。』(G. d. g. W. 494)

然しながら此の如く、創造的衝動にして、憧憬の感情であり、從つてそれの對象は、在るところの或物、にあらずして、在らねばならぬところの或物であるとすれば、吾人の知性が表象の對象として、それより獨立して存在して居ると考ふる處の外界實在は、衝動、又は感情に對して如何なるものであり、又そは、如何なる意味に於て成立するであらうか。今、自我の本性は、前にもしばしば、述べたる如く、それの絕對的自己定立といふこと、卽ち自我が自己自からに對して存在するといふこと、從つて自己反省、自己

限定といふことに存する。然るにフィヒテに從へば、この自我が自からをば反省する又は限定するといふことは自我が自からをば感ずるといふことである。(何となれば、彼れに於ては、感情は衝動の制限 Beschränkung des Triebes に外ならないから。) それ故に、自我の本性は、又自己感情(Selbstgefühl)にありといふことが出來る。從つて、感ずるもの das (Fühlende) と感ぜらるるもの (das Gefühlte) とが同一であるところに又自己感情としての自我の特質が存するのである。然るに、此の如き自我は、それが感ずる間に、毫も彼れの感情をば反省しない。それ故に、そは毫も能動的として現はれずして唯だ單に所動的としてのみ發現する。從つて此の場合感ぜられたる自我は、感ずる自我に對しては、自我ではなくして、却つて自我が制約せらるるところのもの、即ち非我として現はれて來るのである。即ち『唯だ自我が感ぜらるるに過ぎないのに、却つて事物の實在性が感ぜらるるやうに見ゆるのである。』(G.d. g. W. 492) それ故に、事物の實在性は、活動に對する反省が全く除去せられ、又除去せられなければならぬ如き活動、又は自我がそれ自からとして毫も意識せられず又意識せらるることを得ない樣な活動、即ち感情によりてのみ可能である。即ち凡て事物の實在性は唯だ此の如き感情の條件の下にのみ可能である。換言すれば『唯だ自我に對する感情の關係に

よりてのみ實在性(自我と共に非我の)は可能となるのである。(G. d. g. W. 492)而てかの憧憬による實在性への無限の努力は、この必然的なる無限の感情關係に於てのみ實現せらるることが出來ると言はなければならぬ。

十一、以上の如く事物の實在性は感情特に憧憬の感情(又は創造的衝動)によりて成立するのであるが、然しそは、それが憧憬の對象たる限りに於て、決して現實として現はるることは出來ぬ。かの知性の對象としての非我は、實は、自我の原本的なる自己規定又は自己感情に外ならないのである。即ち『自我は、自己感情としての反省に於て、自己自からをば規定する。即ち自我は同時に被規定者たると共に又規定者である。それ故に自我が、外方への衝動によりて刺衝せられる、といふことは、それが規定者たらなければならぬ、といふことである。然るに凡ての規定は、これに對して規定せられ得る質料(Stoff)をば豫想する。即ち平衡はどこまでも保持せられなければならぬ。それ故に實在はどこまでも實在として殘る。換言すれば、實在は感情に對して關係し得る或物として殘らなければならぬ。而し此實在の存在は即ち生活の條件である。かくて、自我に於て現はるる處の衝動は、決して質料一般には關係せずして、唯だ、一定の質料の規定(Bestimmung des Stoffes)にのみ關係する。而て此の衝動によ

に憧憬は、質料その憧憬として感ぜらるる處のものに外ならないのである。それ故斯る規定は、實にかれ自からの創造には關係せずして、却つて、それの規定にのみ關係して居る。』(G. d. g. W. 498-499) と言はなければならぬ。かくて、かの實在への衝動又は創造的衝動はこれをば又規定への衝動 (Trieb zum Bestimmen) 又は規定衝動 (Bestimmungstrieb) として表はすことが出來るのである。

然るに今この規定衝動は、それの必然的制限又は強迫の感情によりて、どこまでも、對象と結付いて居る。即ちそは彼れの行爲に於て、事物の性質によりて制限せられ、從つてそは不滿足のままに殘る。而てそは對象それ自からをば生産することが出來ぬ故に、そは、與へられたるものをば、少くとも規定し又は變化せんと欲する。又そは、事物の現實的性質をば變化することが出來ぬ故に、少くとも、その事物の表象をば變化せんと欲する。然るに前述の如く、實在性一般は、自我に對しては、唯だ感情によりてのみ可能である。從つてこの對象又は、表象の變化への衝動は、やがて感情の變化への衝動である。かくてかの規定衝動は、又これをば、一般に變化への衝動 (Trieb nach Wechsel) として表はし得るのである。

然し、自我はこの感情の變化をば如何にして自からの中に立するのであるか。今

自我が立するところのものは、すべて、反省によりて起る。それ故に感情に對する反省は、感情に對して規定性を與へる。卽ちそこには、一定の感情、又は或物についての感情、卽ち感覺が生ずる。換言すれば『感情に對する反省によりて感情は感覺となるのである。』(G. d. g. W. 514) 然し如何にして此の同一反省に於て、種々なる感情が立せらるることが出來るであらうか。そは唯だ自我が、自己に於て、それの感情狀態の變化をば經驗し、而てかの變化への衝動が滿足せらるる時にのみ起つて來なければならぬ。然るに今吾人の感情には二種ある。缺乏 (Bedürfnis) 及び滿足 (Befriedigung) の感情これである。而て滿足への憧憬なくんば缺乏なく、缺乏なくんば滿足の感情はない。滿足の感情は、唯だ缺乏狀態よりそれの充足狀態への移り行きによりてのみ可能である。それ故に、滿足の感情をば生ずる處の行爲は、全くかの變化への衝動より生じて來るのである。而てここに、衝動と行爲との實際的一致が存するのである。この衝動と行爲との一致に對して嘉納 (Beifall) の感情が起つて來、又この兩者の間の不一致に對して、嫌忌 (Missfallen) の感情が生じて來る。而てこの嘉納の感情を伴ふ所の、衝動と行爲との一致は實に自我の自我自からに對する一致であつて、こは實に衝動及行爲の最高最終の發展である。卽ちこれにありては自我の衝動は、唯だ自我

自からにのみに關係する。自我の衝動は同時に被規定者にして又規定者である。衝動をば制約するものは衝動それ自からであり、從つてそは自己自からによりて滿足せられたる衝動である。卽ちそは『自己自らをば絕對的に創造する處の絕對的衝動(absoluter Trieb)又は衝動の爲めの衝動(Trieb um des Triebes willen)である。而て若し吾人にしてこれをば法則として、表はすならば、そは又法則の爲めの法則(Gesetz um des Gesetzes willen)であり、絕對的法則(absolutes Gesetz)であり、無上命法(kategorischer Imperativ)卽ち Du sollst schlechthin である。』(G. d. g. W. 517-8) 從つてこの絕對的衝動は、それの本質に於て、倫理的衝動(Sittlicher Trieb)であると言はなければならぬ。而て、此の如き絕對的衝動又は倫理的衝動と結付ける行爲は、『唯だ爲さるるが故にのみ爲さるところの行爲卽ち絕對的の自己規定及び自由を以て爲さるる處の行爲である。卽ち行爲の凡ての規定の全根據が行爲そのものの中に存する』が如き行爲なのである(G. d. g. W. 518) かくて吾人の實踐我の最終最奧の根據は此の如き自己自からをば目的とするところの倫理的衝動又は無上命法そのものであり而てこれと內的に結付ける行爲のみが始めて行爲としての意義と價値とを有すると言はなければならぬ。

以上吾人はフィヒテに從ひて、彼れの知識學の根本原理である自我の概念より出發して、この自我の原本的本質をば明らかにし、而てこれが如何にして理論我及び實踐我として發展するかを考察し、而て進んで理論我の根本制約にして而かも決して理論我に對しては說明することを得ざる非我の實在性の意味をば、實踐我の本質を規定し、それが無限の活動、無限の努力、卽ち衝動として如何に發展するかを明らかにすることによりて說明し、かくて凡ての實在、凡ての生命の最終の根據が全く、絕對的衝動又は無上命法としての、倫理的本質であるといふ歸結に到達したのである。卽ち彼れの自我より出發せる主觀的觀念論は必然的に實踐的觀念論又は倫理的觀念論となつて來なければならなかつたのである。而て彼れの道德學の根據は必然的にこの彼れの知識學の歸結の中に橫はつて居るのである。否な實踐的觀念論としての彼れの知識學そのものが、彼れの道德學の根據としてむしろそれの一部を形成して居ると言ふことが出來ると思ふ。それ故に、吾人は今進んで、彼れが此の知識學の根本原理及びそれの歸結に基づきて、如何にして吾人の道德の先天的根據をば明らかにし、道德的法則をば確立し、これが實際的適用に就きて考察し、吾人の道德的生活の意義と價値とを規定したかを考へて見たいと思ふのである。（未完）